
はんばぁぐ

夢介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
はんばあく

【Nコード】
N7467I

【作者名】
夢介

【あらすじ】
夫婦水入らずの夜のはずが・・・
ジェットコースター的なテンポの良いショートショート。

1・(前書き)

作品の性質上数ページありますが、ショートショートです。

「久しぶりの夫婦水入らずだね」

妻はそういいながらケチャップがたっぷりかかってる、一口サイズに切り分けたハンバーグを口に運んだ。

八畳ほどあるリビングに30代半ばくらいだろうか、夫婦がふたりで食事をしていた。

「全く母さんは、急に近所の友達と食事に行って来る、なんて・・・」

夫は、少し不服そうにケチャップがたっぷりかかったハンバーグを口いっぱい頬張った。

「でも、こうやってふたりだけで食べるのもたまにはいいものよ」

「まあね・・・」

と少し照れくさそうに話をしている。

「じゃあ、この後一緒にお風呂に入っちゃう？」

妻は、夫をのぞき込むように甘える目で見上げた。

夫は、

「・・・うん・・・」

と照れながら返事をする。

突然、ピンポンと呼び鈴が鳴る。妻は箸を置き、
「はい」

と言いながら玄関に向かう。

新聞か何かの勧誘だろうか？しばらく玄関で、妻は話し込んでい
るようだ。

夫が気になり始めた。その時・・・

2 .

「きゃあああ」

妻は悲鳴を上げながらリビングに走り込んできた。

夫も、箸を置き妻に駆け寄った。

すると、妻を押しつけるように部屋の中に入ってくる男、手には包丁を握っている。倒れ込んだ妻は、夫に手だけですり寄った。

夫もしどろもどろで

「な、なんだ君は・・・」

と言いながらも、腰が引けている。

「金を出せ！」

強い口調で男がめき出す。 さすがに夫もこの勢いに負けて

「ひいっ」

と言う声を上げ腰を落とす。

男は尚、強い口調で

「金だ！」

と包丁を振り回す。

「か、金はやるから、助けてくれ」

夫は妻に被さるようにながら言った。

男も興奮しているのか、息をきらしながら

「ガタガタ言うんじゃないねえ！」
と夫に包丁を突きつける。

夫はあわてて後ろポケットにある財布を取り出すと男に差し出す。
男は中を確認し、札を全部抜き取り、財布を投げ捨てる。

「も、もういいだろ」

夫は男に懇願した。

男は妻に包丁を突きつけ

「お前のは？」

と詰め寄った。

妻は、今にも泣き出しそうな顔でダンスの上を指さす。

男は、ダンスの上の女物の財布を手に取り、財布の中身だけを抜き出し、またダンスの上に財布を戻した。

「まだ、あるだろう？」

男は包丁を振り回しながら、リビングの机上に並べられていた食事を床になぎ落とし、食べかけのハンバーグがケチャップの筋を残しながら転がった。

妻も夫も口を利けないのか、ただ首を横に振るだけ。

「通帳と印鑑は？」

との問いにも、ふたりとも黙っている。

「ちっ！」

男は舌打ちをして本棚、ダンスの中を手当たり次第に中のものを放り出して調べている。

夫と妻は、目で男を追いながらも、ふたりで手を握り合いガタガタと震えている。

リビングの床は、ちらばった食事の上に洋服や下着、雑誌などが散乱した。

部屋の中で一番大きい洋服ダンスに手をかけて開けたとたん、何か大きなものがドスンと転げ落ちた・・・

胸に包丁を刺され死んでいる老人だ。

一瞬みんなの動きが止まった・・・

「お母さん！」

妻の声が部屋の中に響く。

男は、何が起こったのかわからない様子で

「な、なんだ？・・・お、俺はやってないぞ！・・・誰がやったんだ？」

と焦った口調で言葉を並べた。

「僕がやったんだ」

夫が冷たく口を開いた。

男は、引きつった目で夫を見て包丁を手から落とす。そんな様子を妻は呆然と見ている。

そんな中、夫の冷たい目がにやりと笑い、淡々と話を始めた。

「先週、僕・・・会社を首になって・・・そのことで、これからのこととか色々聞いてきて・・・あんまりうるさいので・・・殺した・・・」

妻は口に手をあててあきれたように見ている。

「俺は、知らないぞ・・・か、関係ないからな・・・」

男は怖くなって逃げ出そうとしているが夫は逃げ場を手でふさぎ

「それは、あんまりにも自分勝手じゃない？」

男はまるで、悪いことをしたことが見つかってしまった子供のような、怯えた顔をして夫の顔をのぞき込む。

相変わらず表情を変えず、夫は話を続ける。

「今日・・・食事をした後に夫婦ふたりで心中しようと思ってたんだよ・・・」

妻は、はつと我に返り・・・

「あなた・・・」

と声を詰まらせている。

「せっかく、ふたりで死ねるようにセットして置いたのに・・・」

「セ、セット？」

男が訪ねる。

夫は、お母さんのいた洋服ダンスの中をゴソゴソと探し出す。洋服を何枚か取り出した後、

「これだよ・・・」

と言いながら、3、4本の筒状のものに、アナログ時計が銅線でつながっている機械をリビングの机の上に置いた。

「じ、時限爆弾？」

見てすぐにわかったのか男の声はひっくり返っている。

妻は遠巻きにその機械を見て震えている。

「ああ、もう時間がないや」

と言いながら、夫は時計をのぞき見る。時間は後15分ほどになっている。

「お、俺は関係ないぞ」

男は、逃げ腰である。

「あんたも運が悪かったね。大事な夫婦水入らずの時間を邪魔するからですよ・・・」

あいかわらず冷たい口調で話す。

「本当にそれ爆発するのか？」

男は口の渴きを押さえながら聞いてみた。

「確かめてみる？」

と言つて、夫は時計のつまみを回そうとした。

「ま、待て待て！」

男はあわてて夫の手を握り止めた。

「どっちにしても、もうすぐ本当かどうかわかりますよ・・・」

男は、へたり込み妻の方へにじりよる。そして妻と手を握りあつてガタガタと震えだす。

「な、なあ、そんな事をしたって、何の徳もないんだぞ・・・」

男は、説得を始める。

「また仕事探して、一からやっついていこう・・・なっ？」

妻は、感極まって大声で泣き出した。

「ここで見たことは黙つてやるから・・・考え直して・・・」

男は、赤い顔をして必死に説得している。

夫は全く聞こえていないように時計を眺めている。

妻は金切り声で泣き叫んでいる。

「と、とりあえず・・・それをどうにかしてして・・・」

と男が言いかけたとき、妻の泣き声がピタリと止まる。

妻は何かを思いだしたように立ち上がりふらふらと歩きだした。
そしてダンスの中から一枚の用紙を取り出し、夫に渡す。

4 .

「離婚届？」

夫はびつくりしたような声を上げた。

「もう、ずいぶん前から考えていたの」

妻は、表情を変えずに話している。

「そ、そんなあ」

夫は妻に、すぐるように言い寄っている。

男は、このすきに出ていこうとしたが、妻に見つかってしまい、襟首を捕まれた。

「あんたにも聞いてほしいのよ！」

と声を荒げて引き戻されてしまう。

男は

「ごめんなさい、ごめんなさい」

と言いながら、妻の前に直立した。

「あたしには、あなたと結婚する前からずっとなつきあっている彼氏がいるの」

夫と男はあ然としている。

「あなたなんかと違って、ちゃんと仕事もしている、大手証券会社の社員なの・・・」

夫は

「ずっとなの？」

と聞くと、妻は大きくうなずき

「それに、おなかには赤ちゃんもいるわ」

夫と男は目を見合わせる。

「もちろん、あなたの子供じゃないわ」

と言ったとたん、夫は大きく崩れ落ちて大泣きを始めた。

「今日彼と会う約束してるから」

と冷たく言い放つと、散らかっている洋服の中から、着替えを始めようとするが、夫は妻の足にしがみついて

「捨てないでくれえ」

と泣き叫ぶ。

「奥さん、それはひどいよ」

そういいながら、男も妻を足止めしているが、全く聞いてくれない。

妻が、散らかっている洋服等の中を模索していると、お母さんの亡骸を見つけ感極まって、お母さんにしがみつки

「お母さーん、黙っててごめんなさーい」

と泣き叫び始める。

夫は妻の背中にしがみつки

「捨てないでくれえ」

と泣き叫んでいる。

男は、

「何でこんな家入っちゃったんだ・・・」

と悔やんで泣いている。

そんな中、突然電話のベルが鳴り響き、みんな我に返る。

しばらく三人とも沈黙して電話を見つめていたが、一番近くにいる夫が、咳払いをひとつして電話に出る。

5 .

「はい、もしもし……」

妻も男も動きを止めて、夫の電話の声に耳を傾けている。

「おう、吉田か……何？……宝くじ？……」

妻と男は、耳だけじゃなく顔も夫の方を見た。

夫の顔が一変し

「当たってるう？」

と喜びの表情になる。

その瞬間妻は慌てて新聞を探し、男は夫の財布の中に宝くじがあったことを思い出し、慌てて財布からそれを取り出した。そして部屋中央に、ふたりでちらかっている物をどけて座り込んで確認し始めた。

「い、いくわよ」

ふたりとも息を飲んだ。

「一等二億円……」

そこに電話を置いた夫も加わる。

「32組……」

男は復唱しながら確かめる。

「3……5……7……4……6……5……！」

最後の数字を読み終えたたん、三人の顔が喜びの顔になる。

「やったあ！」

思わず抱き合って喜ぶ三人。

「あなたあ、やったわねえ！」

「ここには、金があると思ってたんだよな」

喜びを隠せない妻と男。夫も

「だろ？だろ？」

三人で輪になって浮かれている。

満面の笑みで、三人とも子供のようにはしゃいでいる、妻は「あなたにずっとついていくわあ」

男は、うれしそうに当たりくじを手につかみ「俺にも少しわけてくれよな」

夫も

「おう、おう、わかった、わかった」
とうれしそうにうなずいている。

三人で当たりくじを囲み

「バンザイ」「バンザイ」「バンザイ」
とバンザイ三唱をして浮かれている。

6
・

その時、
時限爆弾が0秒を示した。

6・（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

こついうテンポの良いショートショートを作っていますので、他の作品も是非ご覧下さい。

感想や評価や批評などもいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7467i/>

はんばあぐ

2010年10月22日09時41分発行